シークレット・ズー

夫馬　基彦

1

先だって我が家の近くで「ナイト・ズー」という催しがあった。直訳すれば「夜の動物園」である。場所は懐古園の向う隣にある市立の小さな動物園だ。

そこは懐古園とは橋でつながっていて無料で入れるから、私は朝八時ごろ散歩の一環としてまだあけたての門をくぐって時々通り抜けるが、夜に入ったことはない。園は夕五時には閉まってしまうし、イメージとしても動物園と夜はそぐわない感がある。

「ナイト・ズー」は夕六時から八時までの設定だった。夏の宵だし、夜の動物園、夜の動物たちはどんなものかしらと興味をそそられ、私はいささか胸ときめかせて門をくぐった。

来場者は親子連れを中心に六、七十人で、ムササビの檻の前に集まっていた。若くてなかなか美人の女性飼育員が、檻の中でまるで猫か犬のようにムササビを抱いて習性を説明し、時々くるみやひまわりの種などを食べさせたり、両手から両脚の間にある皮膜を開いて見せたりした。脚の間の皮膜を開くときは何やら股間の秘部を見せるような感じがして、ちょっと妙な気分だった。ムササビはその皮膜を使ってグライダーのように樹間を飛ぶそうだ。夜行性だというから夜だけなのだろうが、時に百数十メートルも飛ぶそうだから、どんなふうだろうとしばし想像させる。きっと目がいいのだろうし、その目は緑色に光っていたりするのではないか。日本特産だというこの獣を残念ながら私は見たことがない。

ムササビのあとはライオンの檻前に移動した。ここには雄雌つがいの立派な姿容貌のライオンがいて、私の朝の散歩時にも谷をはさんだ向うから「ウオオーン」と風格ある雄叫びを聞かせたりするが、夜の今は何も啼かない。ただ足早に鉄檻の中で行ったり来たりし、まもなく別の仕切りの中に置かれた馬の赤い肉塊への扉を開かれるや、スルスルっと近寄って「いただきます」の挨拶やその種の合図らしきも何もなしで、実にがつがつさくばくと食べていく。ろくに噛む感じはなく飲み込むようでなんとも早い。見物人は「アー」とわずかな嘆声を漏らして、みな気をのまれたようにそれを眺めた。

そして何ごとかを考える間もなく、大きな肉隗は床に赤い血のしみを少しだけ残してきれいに消えさり、二頭のライオンはぺろりと赤く長い舌を出して口の周りをなめただけで、むろん「ごちそうさま」も言わず、ただ満足げに奥に引っ込んで床に腹ばいに身を横たえた。万事終了まで都合一切で約五分ほどだったのではと思える。

私は「ゴクン」と唾を飲み込んで歩きだしたが、それはもとより食欲を刺激されてではなく、あの食べられてしまった馬肉の元、つまり生きていた時の馬の表情を想像してのことである。

もう暗くなった園内はさすがにいつもとは様子が違い、日中なら私を見るたびキッキッと近寄り、檻網につかまって声を出して挨拶してくれる手長猿や尾長巻猿なぞも、今は何も言わずじーっとただ私を見つめるだけだった。何を考えているかは全く分らない。ひょっとしたらいつもと違って眠りの前の静かな時間を乱され、迷惑なことだと思っているのかもしれない。

小さな池の周りにいる、ふだん私が好きなペンギンたちは、みな小さな木の小屋に入ってしまって姿も見せなかったが、フラミンゴだけは池の向うで昼間同様片脚で立ち続けていた。あれはああして眠っているのか、それとも客の足音が消え去るのを待っていたのだろうか。私は邪魔をしては悪いような気がして早足で立ち去った。

そのナイト・ズーの宵からほんのしばらくして、私は我が家のいわば隣で異なものを見た。私が庭というか敷地内で木や丈の伸びた草の刈り込みなどをしていると、柵の西南側の外、小さな未舗装道をはさんだ向うの「林業小屋」前に見かけぬライトバンが停まり、中から黒い金網製の細長い檻らしきものがいくつか運び出され始めたのだ。林業小屋は市の森林課の管轄で、ふだんは殆ど締め切りの場所である。中には、文字通り森の手入れや遊歩道の保全に使う林業用の道具類があるという印象しかない。ライトバンには小さな字で「小諸市」と書いてある。

私は長靴姿のまま裏木戸から出て、小屋の前へ行った。作業服を着た三十前後の二人の人の良さそうな人物が確かに檻を車から小屋に運び入れており、檻の中には細長い獣がいる。いたちよりはだいぶ大きく、色も灰茶っぽく、尾がふさふさと大きい。別に隠す様子もないので、私は聞いてみた。

「これは何ですか」

向うも私がすぐ隣の住人であることは分っていたのかもしれない。しごく普通の調子で答えた。
「白眉芯です。このごろ増えてるんですよ。これは三岡の果樹園で捕獲したものです。果樹園の中には全滅した所もあるんですよ」
「へーえ、果樹がですか」
「ええ。実が全部かじられちゃって」
「ふーむ」
白眉芯なら私は知っていた。檻の中の獣の顔を覗き込むと、確かに眉の間から鼻にかけてが白かった。それが名前の由来で、眉の芯が白い意だ。まだ生きている白眉芯は、いかにも野生動物らしい獰猛で狡そうな眼光でこちらをうかがった。
私はもう随分以前、伊豆の山村でこの白眉芯としばしばまみえたのだった。まだ二十代終りの頃だったが、私は過疎化した山間の集落の小さな元農家を借りて、独りで晴耕雨読生活を試みていたことがある。私は若いころからそういうことが好きだったのだ。
場所は下賀茂温泉から小一時間山中に入った小集落のみかん園だった。みかんといっても栽培されていたのは伊予柑と呼ばれるかなり大きめのオレンジみたいな品種で、甘くてうまいし、四国の伊予と似た温暖条件の地でしか採れないので、値段も高く、この地方ではかなり高級作物だった。私はそのみかん園脇の道の先にある一軒家の知人宅へ行き来するため、夜もしばしばそこを通った。そういうとき、「ガサッ」という秘密めかした音に目をやると、暗闇の中に爛々と光る緑色の二つの丸い発光体がじいっとこちらを睨んでいるのである。ぎょっとして見つめると、それは少し動き、色と光もいくばしか玉虫色に変化し、いかにも生きた魔性ふうに動く。しかもよく見ると、それは一組だけではなく、あちらにもこちらにも一組づつ、殆どみかん園全体に光っているのだった。これは初めての時は相当におそろしい光景で、自分が何か得体のしれぬ世界に遭遇してしまったか、人だまのいる墓場に放り出されでもしたかのごとき、背筋が凍えるような心地になるのだった。
一度目は蒼くなって走り抜けたが、二度目からは用意した懐中電灯でサッと照らすと、緑色の発光体の元は狸とも狐ともつかぬ獣の目で、眉の間が白かった。それが白眉芯だった。
「これをどうするんですか」
尋ねると、作業員は檻の一つを屋内に運びながら、簡単に言った。

「処分します」
「え、処分？」
言い方がどこか無機物を扱うみたいな調子だったので、私は咄嗟に意味が呑み込めなかった。
「ええ、殺処分です」
言われてみればそれ以外ないような気がしたが、私はさすがに沈黙したまま作業員について林業小屋に入った。そのがらんとしたコンクリート土間には頑丈な細長い金属製か樹脂製の箱があり、白眉芯は檻ごとそこに入れられた。箱には細いゴム管がつながっており、ゴム管の元には小型のガスボンベがあった。
「二酸化炭素です。で、これをひねると、二分半で完了です」
作業員はそう言ってゴム管の元部の栓をひねった。さすがに私が息をのんでいると、箱の中で一、二度「ばたん」と揺れ跳ねるような音がした。
「白眉芯はガスを入れ出して二秒で気を失いますから」
作業員が初めて感情の少し入った低声で言った。「から」という語尾も、「だから白眉芯も苦しまない。残酷じゃない方法です」という意が込められているようだった。
「なるほど」
私もそう言って頷いた。確かにホッとした気持もあった。
まもなく箱が開けられ、中から檻が出された。中では白眉芯が完全に死んでいる。檻のふたが開けられ、中身が出される。体はまだぐにゃりとして柔らかい。目は開いたままだ。私が屈んで思わずその灰茶色の毛に掌を触れかけると、声が飛んだ。
「あ、触らない方がいいですよ。野生動物はいろんな菌を持ってますから」
私はビクッと手を引っ込めた。
作業員は屈むと手袋をした手で白眉芯の瞼をそっと閉じ、それから丈夫そうなビニール袋に死体を入れ、紐で厳重に袋の口を縛った。そうして今度は土間の隅にある、アイスクリーム屋の大きめの冷蔵庫みたいな白い箱のふたを開けた。冷たい霧が立ち昇った下を覗くと、ビニール袋に入った凍った白眉芯が何頭も重なって見えた。
「こうですよ」
作業員が一つ二つを取り上げて見せたそれらは完全に固く冷凍化されていた。よくは分らぬが、中にはすでに十頭や二十頭はいそう

だった。
作業員はその上にそっと新しい仲間を置いた。まだ柔らかくて長いせいもあり、置き方は両手で捧げ持つみたいで丁寧だった。
白い、清潔そうな蓋がパタンと閉められた。
「これはどうするんです？」
「時々まとめて東京へ送ります」
「えっ、東京。どういう所へ？」
「麻布獣医科大です。解剖用に使うんですよ」
私は「なーるほど」と今度は少し長くのばして答えた。
また次の白眉芯に対し同じ手順を繰り返し始めた作業員たちをしばらく眺めてから、私は林業小屋を出た。

それから私にとってこの小屋の見え方が変った。
これまでは単なる殺風景な道具小屋、ほとんど人の出入りもない無味静寂な場所、と思えていたのが急に何か妙な存在感を持って感じられ出した。別に気持が悪いとか、嫌な場所というわけではない。死を感じるとかいうわけでもない。
だが、何かを感じるのだ。あそこにはつい最近まで野や畑を跳梁していた白眉芯が何十頭も、五体満足に眠っている。白く、固く、目をつぶり、凍って眠っている。あれは解凍したらひょっとしたら動き出すのではないか。いや、さすがにそうはいかずとも、獣の魂も凝固してあの白い箱の中に積み重なって何ごとか夢を見ているのではないか……。
しかもたぶん、このことはあの作業員や森林課の関係者以外ほとんど知らないと思えるし、御近所でも知っているのは私くらいではないのか。おまけに私はあの小屋のすぐ隣に住んでいる。あの作業員たちですらふだんはずっと離れて暮しており、小屋が視野に入ることはあるまい。なのに私は、すぐ隣で、食したり、眠ったり、考えたり、日常生活をしている。白眉芯に一番近いのは小諸市でも私なのではないか。
そう思いだすと、私は庭仕事の最中にも、あるいはリビングで書見中でも、柵の向うにチラと林業小屋の黒い扉が映じるだけで、何十頭もの眠る白眉芯が脳中でうごめきだすのだった。
そしてその白眉芯は、時に若き日のあの暗闇の白眉芯の群れを想い出させ、同じ道で出会った別の獣、猪のことまでも想い出させた。

猪とは夜道というより夕方くらいに出会ったのだが、みかん園よりはだいぶ下の畑と水場近くで「ガサ」という音とともにいきなり鉢合わせすることが多かった。最初は本当に驚いたが、猪は顔つきと牙のおそろしげなる様にかかわらず拍子抜けするほど小心で、臆病そうな目をしょぼつかせるようにして向うがさっと逃げ出すのが常だった。

ほかにも私はこの伊豆の里にいた時、自宅近くの畑に現れた穴熊と遭遇したことがある。いたち科の獣で狸と似た感じだったが、名前に熊が付くことと、足指の爪が鋭利だから気をつけろと村の人に言われていたせいもあって、私は見つけた途端ちょうど手にしていた天秤棒で殴りつけてしまった。すると穴熊は猛烈なスピードで斜め直線に二、三回逃げ、そのつど私が天秤棒を振り回すや、今度は半ば立ち上って歯と確かに鋭利な爪をむき出し、「クワーッ」と相当大きな声で威嚇した。それで私はつい脳天に天秤棒を振りおろし、穴熊を撲殺することになってしまった。穴熊は口から血と泡を吹き、目を見開いたまま痙攣してやがて果てた。まさに虐殺そのものである。

終ったあと私は後悔極まりなく、今度はせっせと穴を掘って穴熊を埋葬し、墓を作ったのだが、本能的にあのような立ち廻りを演じてしまったのは、いわば私の若さであったという気が今はする。六十代の今は心身両面でそんなことはすべくもないが、二十代の当時は精気と闘争本能が身に満ちていた。言うならこちらも獣だったのだ。当時は今よりもずっと多く畑を耕し、半ば自給自足的に「自然生活」を目指していたのだけれど、ちっとも自然になぞなれていなかったのである。

2

我が家のリビングや台所の窓からは、時々動物が見える。家の西から西北側にかけてが、かなり広い野っ原と隣家所有の畑になっているからだ。畑はさほどの広さではないが、四等分して隣家の雲笠さんのほかその知人三家族がそれぞれ耕している。野っ原の向うは相当急な崖になっていて、大きな木々で覆われ、そのまま自然の森につながっている。森は下っていくと右は中澤川という谷川を抱え、左では懐古園からの谷と交わり、真ん中ほどでは道路をはさんで割

合広い棚田に出、もう少し先では結局すべて千曲川に至る。
最初に動物を見たのは、まだ私がここに住みだして間もない三年前の春先だった。
ある時ふと畑に黒っぽい妙な獣が歩いているのを見つけた。頭は黒く目も黒眼でどこかキョトンとしており、小太りで、よちよち歩くさまは狸みたいだが、異様なのは腹から背中にかけて半分くらいの毛が抜け赤白く肌がむきだしな点だった。それが畝の間に放置された芋類をかじったり、隅に枯れたままになっているとうもろこしの幹を立ち上って割いたりしている。しばらく見ているうち獣は明らかに狸で、体は重度の疥癬におかされていると知れた。
日ごろ明るいさなかにこんなふうに狸を見かけることは一度もなかったし、あたりをおびえた目で窺いながら食べ物をあさる様はいかにも飢えた様子で、痛ましい感じがした。おそらくどうにか冬は越したものの、疥癬のせいで体力も衰え、十分な餌も確保できず、やむなくつい明るい朝の畑にまで出てきてしまったという印象だった。
「捕まえて疥癬の薬でも塗ってやりたいくらいだな」
私は連れ合いにそう言ったが、むろん出来るはずがないのは明らかだった。現に狸はほんのしばらく何かを齧っていたかと思うと、さっと動き、そのままかなりよたよたと向うの草藪に逃げ込んでしまった。
疥癬狸はそれから二、三度姿を見せたから同じ狸だったのではと思えるが、一度だけ疥癬にかかっていない全身黒っぽい毛におおわれた狸も姿を見せた。つがいの妻か夫だったか、あるいは仲間だったのかもしれない。

次に見た動物は鹿だった。季節をはっきり思い出せないのだが、小雨が降ったあと野っ原の奥半分くらいが霧で半ばもやっているときだったから、梅雨の初めごろででもあったろうか。小諸ではそのころは時に肌寒くさえある季節だった。時間は夕五時前くらいだったと思う。霧の中に大小二頭のまさに鹿毛色の鹿がすっと立っていた。角はなかったからたぶん母子だと思う。子の方は顔もまだほっそりし、目はつぶらに澄んで、愛らしかった。母子とも体はすっきり均整がとれ、短毛できれいだった。
「あ、シカ、シカ」

リビングにいた私は鹿から視線は外さぬまま連れ合いを呼び、手で鹿の方を指した。

と、二頭の鹿はまるでかなり離れた建物の、窓が閉じられた屋内での声と行動が耳と目に入ったかのごとく、ピッと耳を立ててこちらを見た。実際に中まで見えたのかは定かでないがしばらく凝視していてから、やがて母親が子鹿を促すようにして二頭そろってサッと崖の藪に消えた。気のせいか子鹿は消える間際に、もう一度ちらとこちらに視線を流したような気がしたのは欲目だったろうか。

それから私たち夫婦はずいぶん気をつけて鹿が現れるのを期待した。雨が降ったり霧が出てやや薄暗くなると、「こういう日は出るかも知れんぞ」と、訳もなく屋内での立ち居まで静かにして待った。

だが、なかなか現れない。一度チラとうしろ姿だけ見えた気がしたものの、ちゃんと再会したのは一年半近くたってからのことだった。

再会といっても以前と同じ鹿か否かはむろん分らない。今度は立派な角がある牡鹿と、同じくらいの大きさの牝鹿の二頭だった。場所だけは以前とほぼ同じ崖近くにすっくと立って、凛々しくあたりを眺めていた。この日は秋のさなか十月で霧も出ていず、清澄な空気の中だった。あたりの木々はきれいに紅葉しており、まるで花札の十月の札の光景のようだった。私は今度は連れ合いに向って、声も出さず体も動かさず、ただ右腕と手だけで「アレ、アレ」というように鹿の方角を示した。連れ合いもすぐ分って、今度はそうっと窓際に寄り体を沈めるようにして鹿の方を見た。リビングの窓は大きいうえ遮光ガラスになっているので、中にいると外はやや暗めに見えるが、外からは案外よく中が見えるらしいことをしばらく前から知っていたからだ。

鹿はやはり気付いたようだった。二頭とも耳がピクピクっと動き、はっきり耳の向きがこちらになり、目もこちらを見た。私は目が彼らと合った気がした。特に牡鹿とはぴったり合った気がし、しばらくじっと見合った後、向うがふっと視線を変え、二頭ともかなりゆっくり崖の藪に消えていった。

三番目は狐である。

これも二度ほどあるが、一度目は例の畑の手前、つまり我が家の裏木戸と柵に沿った土の道でだった。ふいと畑から出てきた茶色・

細身の獣が、わりあい悠然と道で左右を眺めたのち、私道の出口方向に向って走り出したのである。
最初は犬かと思ったのだけれど、犬にしてはどうも細いし、頭も三角っぽく、なにより尻尾がふさふさと長く太い。それに走り方が少々跳びはねる感があり、首輪類が全くない。それで「狐だ！」と誰に言うわけでもなく声に出していた。やはりというべきか、狐はその声に符節を合せるように猛然と駆け、私道の先を左折せずそのまま藪の中に直進して、消えた。犬ならこういう走り方はまずしまい。
事実、それからしばらくして、ある午後、畑の耕作者の一人、樫山さんが「こらッ」と叫んで、突如、長靴姿で道を走りだしたことがある。樫山さんは六十二、三歳、定年後、週に三日ほど会社に嘱託勤めの技術者で、かなり猫背の温厚おとなしやかな人物だ。走った姿も「こらッ」という怒声もついぞ見聞きしたことがない。だからこの時も、リビングの窓からそれを見た私はずいぶん驚き、慌てて立上って何ごとならんと眺めた。どたどた音立てて長靴姿で走る樫山さんの先には、茶色とももう少し黒っぽくも見える細身の獣が必死に逃げていた。体がそれこそまっすぐに伸び、飛ぶように走っている。だが、その獣は私道の先に至るとさっと道なりに左折し、更に広い市道の方に向って行った。
「何か変だな」と思っていると、案の定、まもなく樫山さんが走るのをやめ、戻ってきた。
「何だったんですか？」
私があいていた小窓から顔を出して尋ねると、答が返った。
「いやあ、白眉芯かと思ったけど、犬でした」
野生動物と家畜はやはり違うのである。
二度目は近所の博物館裏を散歩中だった。そこは例の野っ原の端からつながっている幅ほんの一メートルほどの徑で、私がひそかにひとりだけの散歩道にしているところだった。右側が崖の自然林になっている。そこを歩いている時、最初から明らかにそれと分るやや小ぶりの狐が、サッと逕を横切り、博物館裏の物置脇へ駆け込んだのだった。
面白かったのはそのさい狐は慌てすぎて駆け込み先を間違えたのか、突き当りで抜け道がなくなり、文字通り右に左に右往左往した挙句、私のかなり近くまで駆け戻って左に抜けていったのだった。

その慌てふためくさまが野生動物にしてはいかにも間抜けていて愉快だった。

狸も鹿も狐も直接はっきり見たのはその程度で、さほどの回数ではなかったが、しかし彼らは実はもっとしばしば界隈に現れていた。

畑へやってくるのである。畑は先述来の樫山さんや雲笠さんらのもののほか、もう一つ、私の連れ合いが徒歩三分ほどの場に借りている別ものの、計二ヶ所だった。

どちらもしばしば、特に春から夏にかけて、作物の新芽などが食い荒されるのである。枝豆やひまわりが伸び出すと、十センチくらいのところで柔らかい穂先が軒並み食べられ、とうもろこしに至っては若苗の頃食べられるばかりか、なんとかそれを免れ、やがてかなり成長し実が膨らんでもう明日は収穫というまさにその前日、絶妙なタイミングで殆ど全部引きちぎられ食べつくされるのだった。落花生も同様だ。いずれも直接行き会うことはほぼないから、夜中か明け方ころの活動だろう。

足跡からいって、若穂を食べるのは鹿、とうもろこしや落花生は狸らしかった。樫山さんは先述の際「白眉芯」の名を出したから、あるいは白眉芯も出ていたのかもしれない。ただし、白眉芯の足は電線などを掴んで歩いて渡れる構造になっており、足跡がどうもよく分らない。足跡どころか姿も公然と見せ声までうるさいのは烏だが、これは獣の範疇ではないから今はさておく。どこか小憎らしくて言うだけ腹が立ってくるからだ。

狸も鹿も、ことに枝豆やとうもろこしを軒並み荒らされた時なぞは、樫山さんもその隣の畑の元区長夫人も我が連れ合いも、「またやられたあ！」と歯ぎしりせんばかりに悔しがったりしたが、「腹が立つ」のとはちょっと違う感覚らしかった。彼ら狸や鹿としても生きるためというか、あるいはうまいものを食べ生を謳歌するためには至極当然の行為とも思え、「悔しく」はあっても理解できるのである。どこか可愛くさえあるらしく、苦笑が伴ったりする。

不思議なのはその仲間にどうも狐の名が出てこぬことだった。出ていないはずはないのに、彼らがどれかの作物をどう荒しているのかはなかなか分りづらいらしく、誰も直接口にのぼせぬのだった。

さて、今年の春あたりからだが、界隈でいくつか妙な事件というか事象が相次いだ。

まず最初は連れ合いの畑でだった。彼女の話ではある日、畑の真ん中に古サンダルが放り投げてあったので片付けたところ、数日後また道際に別の古サンダルが投げ捨ててある。いったい誰がそんなことをするのかしら、なにかあたしへの嫌がらせかしら、と言うのだ。私も見に行ってみたが、確かに、耕したての、まだ何も植えていない畝の中ほどに、古サンダルと汚れた縄の切れ端が散らかっている。いたづらにしてはだいぶ悪意があると言えるが、それにしても誰が、なぜなのか、訳が分らない。

首をひねっていると、二、三日後には畑の手前の昔の武家屋敷、竹田家の門前ど真ん中に古サンダルが門に向けて歩くように妙にきっちり置いてあった。連れ合いはこれを見てターゲットはどうやら自分だけじゃなさそうだと知って半ばホッとし、半ば更に怪訝な気分になった。だが、独り暮らしの竹田さんにそのことを言うと、彼女は「きっと犬よ」とわりあい意に介さないので、そのままになった。

ところがそれから一ヶ月ほどして、今度は我が家のすぐ東隣の、これも独り暮らしの老女性が、近ごろ庭にサンダルやごみが投げ込まれる、誰かが入って来ているのでは、と不安がって近所の人に訴え歩く出来事が起った。この家の場合、かなりきちんと生け垣をした小ざっぱりした庭でのことだから、いかにも妙だ。

で、近所中が更に首をひねったが、しばらくしてその御向いの奥さんが、

「今朝早く、うちの門の前で狐がサンダルを抱えてじゃれていた」

と証言したのだった。

おかげで、なんだ、犯人は狐だったか、と一同安堵したわけだが、私はそれにしてもなぜいつもサンダルなのか、そのサンダルはどこから来るのか、となお怪訝に思っていた。サンダルがなくなったという家はどこにもなかったからである。

それからだいぶたった夏のさなかの八月のことである。早朝五時過ぎに目が覚めてしまった私は、ひとりで起き出し、まだ薄明の五

時十分ごろ台所の窓から何気なく例の原っぱを見たところ、そこにかなり大きめの狐が二匹いるのを発見した。形状・特徴から明らかに狐に間違いなく、しかも二匹とも今まで見た中で一番大きかった。

それが草の中で何やら咥えてはじゃれている。一匹は茶色っぽいもの、もう一匹は黒に少し白も混じった何ものかを噛んだり口で放り投げたり、投げたものを今度は両前足でさながらボールのように弄んだり、明らかに楽しげに遊んでいるふうに見えるのだった。食べ物や生きた獲物相手では決してない。

「狐が遊んでいる！」

咄嗟にそう思った私はその光景に魅入られるように引き付けられた。薄明が次第に明るんでいく中で、無心に戯れ続ける二匹の狐。それも子狐ではなく、大型の大人の狐だ。それが八月の生暖かさと朝の冷気を両方合せ持ったような無人の野で遊んでいるのだった。二匹が交互にふっと跳び上がったりすると、幻想的な気配さえ漂った。あたりはまったく無風だった。狐たちの声はかすかに聞えるような気もするが、窓はどこも閉め切りだし、息をこらして見つめている身には全く無音の世界のようにも思える。

啼いているとしたら、やはり「コン」なのであろう。微かにそう聞えるような気がする。「コン、コン」と乾いたような声で啼き、ふわっと跳び、ふわっと着地し、また跳ぶ狐たち。

本当に夢幻的にして、時が停まったような光景だった。私は陶然とそれを見続けた。

どれほど時間が経ったか分らない。やがて狐たちはふと動きをとめ、私の方をしばし凝視してから、別に急ぐ様子でもなくすうっと崖の繁みに消えていった。

明るくなって一時間ほどした後、私はもう狐たちは界隈から遠くへ去っているだろうと考え、原っぱのさっきの場所へ行ってみた。そこには茶色のサンダルが片一方と、黒いサンダルが片一方、それに黒に白紐の付いたスニーカーの片一方が散らばっていた。いずれもいかにも人間の足の臭いが染み付いていそうな古びたもので、スニーカーの靴紐は何カ所か食いちぎられていた。

朝食の時、連れ合いにこのことを話すと、彼女は言った。

「そりゃあ、どうも信じがたいな。子狐ならともかく親狐がそんなふうに長い間ここらで遊ぶなんて。寝ぼけて幻覚でも見たんじゃな

いの」
「そんなことはないよ」
私は否定したが、しかし大きな声で言いつのる気にはならなかった。あれは見たことのない者には信じられぬ光景だったかもしれないと思ったからだ。
サンダルとスニーカーはその後もほぼ同じ場所にずっとあり続け、私は明け方早起きしては、また狐が来てはいまいかとカーテンの隙間から覗き、あの日ふわっと跳んでは遊んでいた光景を夢のように想い浮べ続けた。
サンダルやスニーカーがなくなったという話はまだ近所のどこからも聞えてこない。

（信州アカシア林住期　その五）